

エコノミーと 現代

経済という言葉

広く知られているように、「経済」という言葉は、「経世済民」（世をおさめて民をすくうこと）に由来します。しかし、「経済再生」や「経済グローバル化」等の用例を引くまでもなく、「経済」の語源によってこの言葉の意味が十分理解できるわけではありません。経済を学ぶ難しさは、その研究対象が漠然としていてつかみ所がないことにあると思いますが、その原因の一つに、「経済」が元々西欧の「エコノミー」概念の輸入物だった事情があると思います。

日本におけるエコノミー概念の摂取は、一般に、ウイ

谷村 智輝

Tomoki Tanimura

【研究テーマ】

現代資本主義論



リアム・エリス（1800-1881）の著作『社会経済学概論』（1846）第2版（1850）がオランダ語に翻訳・出版された後、明治の代表的な知識人の一人であった神田孝平（1830-1898）がこれを重訳し、『経済小学』（1867）として出版したことによります。原著者であるエリスは、海上保険業で名を成した実業家であると同時に教育改革家でした。労働者階級の教化の必要性和そのための教育の重要性を主張すると共に、教育改革の柱に経済学の教授を据えたことで知られています。『社会経済学概論』は経済学の教科書だったのです。一方、『経済小学』をみると、雇直（いまの労賃）、財本（資本）、利分（利潤）といったように、未知の学術用語を訳出する神田孝平の苦闘がうかがわれます。ともあれ、「経済（学）」の意味を理解するには、その元になっている「エコノミー」について考えてみる必要があると思います。

エコノミーとは？

エコノミー概念は非常に古い歴史をもち、多様な意味で用いられてきました。その出発点は、古代ギリシャの「家政術」です。一家の主は、奴隷や家畜、生産用具などの有用物を種々の目的を勘案しつつ秩序だって利用し、家の舵とりをする必要があります。「家の管理」がエコノミーです。その後、神による万物の統治に概念が拡張されます。そうすると、神の統治におけるキリストや教会の役割、神の本質、神と人間の関係等々が問題となり、エコノミーの意味が変化していきます。基本的な



ことは、人間は有用物を用いて有用物を生産しそれを消費して生きるということです。しかも、近代の特徴は、有用物の生産や消費が広く他者との交換を通じて行われることです。人間同士の広範な相互関係には、一定の秩序がなければなりません。近代のエコノミーの秩序を巡って、18世紀フランスの経済学者達やアダム・スミス（1723-1790）等、経済学の先達が議論を展開していきます。ともあれ、われわれがいま理解するエコノミー＝経済の基本的な意味は、「生活に必要な財サービスの生産・分配・消費の一連の過程」であり「それらによって形成される人間の相互関係」です。人間相互の経済的関係は、社会を形成すると同時に失業や貧困、貿易の是非、地球環境問題等々を生み出します。こうした諸問題を研究するのが経済学の役割にほかなりません。

グローバル・エコノミーと付加価値の連鎖

現代のエコノミーは、グローバル化が特徴です。原材料から完成品になり消費者に届くまでの工程を、様々な国・地域の人々（企業）が担っています。各工程で付加価値が生み出されることから、「付加価値の連鎖」がグローバルに形成されていると言えます。ところで、日本製の部品を用いて生産された製品が中国から米国に輸出されるとします。このとき、米中間の貿易額を見ても日

【付加価値】 生産過程で新たに付け加えられる価値。総生産物から原材料費や機械設備などの減価償却費を差し引いたもの。

本の果たした貢献の多寡は解りません。既存の貿易統計は2国間の貿易関係に基づいているので、付加価値がどこで生み出されたかを捉えることができません。付加価値の連鎖に立脚すると、日本で生産された部品そしてそれに体化されている付加価値が、米国に輸出されたと考えることができます。また、各々の過程で創出された付加価値は、企業の利潤や労働者の賃金となり、国内経済で循環していくわけです。付加価値から貿易を考える面白さは色々ありますが、例えばある国の景気の善し悪しが他国に与える影響をよりの確に理解できる点が挙げられます。先の例に従えば、米国の景気が良いと中国の製品もたくさん輸入されるでしょう。それは付加価値連鎖を通じて、日本経済にも影響するのです。近年、国際機関が協力して付加価値連鎖に基づいた貿易統計を整備しつつあります。付加価値貿易の現状を見ると、日本の輸出に占める外国の付加価値の割合は世界の平均よりも低く、日本全体の「産業力」を表していると解釈できます。とはいえ、その割合は徐々に上昇していることも事実ですから、決して安心してはいられません。また、IoTなど昨今の情報技術の変化も付加価値貿易の形を変えるのではないかとされています。現代のグローバル・エコノミーのなかで、付加価値をどう創出していくかが問われているのです。